

保護者各位

鳥取西小学校 校長

高島 昌之

## いじめを「脳科学」で考える

他の動物と比べ非常に脆弱であるヒトが生存するための武器として使っていたものは何か？それは、「集団を作ること」である。これは、「**社会脳**と呼ばれる**前頭葉**が持たしている。種を残すために、社会的集団を作り、協力的行動をとってきたヒトにとって、最も脅威となるものは、「**フリーライダー（協力行動をとらない、じゃまをする、ズルをする人）**」であった。

種の存続のために共同体にじゃまになりそうな人物を見つけたら制裁行動を起こして排除しようとする機能として、下記の2つが脳に備え付けられたのではと脳科学では考えた。

1. 「**裏切り者検出モジュール**」…フリーライダーを見抜く機能
2. 「**サンクション**」…制裁行動

この「**サンクション＝制裁行動**」は、**集団になればほぼ必ず生じる**。そもそも、「仲間を守ろう」「社会性を保持しよう」という、集団を維持するための「**向社会性**」の表れでもある。「向社会性」とは、反社会性の反対の意味で、社会のために何かしよう、他人のために役立つと行動する性質のことである。しかし、これが高まりすぎると下記の2つの危険な現象が現れる。

1. 「**排外感情の高まり**」…自分とは違う人々に対する敵愾心や不当に低く評価する気持ち
2. 「**過剰な制裁＝オーバーサンクション**」…発動すべきでない時にも発動してしまう制裁

### ～ いじめに関わる脳内物質 ～

#### ドーパミン【**快楽ホルモン**】

「自分が生きていくために必要なもの」や「子孫を残すために必要な行為」をする時に活性化する。

「強い排除」の行動をする時に、ドーパミンが放出される。

所属集団＝種を守るために罰を与える、「正義」を持って制裁を加えるという「**快楽**」を感じる。

「間違っている人を正す」「自分は正しいことをしている」が、ドーパミンという脳内麻薬を活性化させている。

#### セロトニン【**安心ホルモン**】

多く分泌されるとリラックスや楽観的になるが、少ないと不安になり、情動を抑えられなくなり衝動的になる。

遺伝子を調べるとセロトニンを少なく作ろうとする遺伝子が、世界29か国で日本が一番多かった。日本人は先々のリスクを予想し回避する「**慎重・心配性**」が多く、「**空気を読む**」人が多い傾向にある。

セロトニンが少ないと、不安が強くなり、被害意識が高まる。「**裏切り者検出モジュール**」がすぐ発動し、逸脱者を見つけて集団から「**排除**」する行動が発生しやすくなる。

#### オキシトシン【**愛情ホルモン**】

脳に愛情を感じさせ、親近感を感じさせる、人間関係を作るホルモン。

人の感情に直接的に作用して、愛情や絆、仲間意識を作るオキシトシンだが、高めすぎると「**妬み**」や「**排除感情**」も同時に高めてしまう面もある。

「仲間を大切にしよう」という気持ちは、良い仲間を選別しようという気持ちにつながる。そのため、**異質な存在を危険だと判断して、「排除」が発生しやすくなる**。

**快感は理性より強い**。そして、**集団は、快感を作り出す環境になりうる**。簡単に理性を失ってしまう実験がたくさん報告されている。理性や判断、道徳性を司る**前頭葉（脳の前面にある領域）**は、9歳から13歳まで一挙に発達する。小学生から中学生の間が、成長する時期なのである。**長時間のゲームは、前頭葉への血流を妨げ成長を止める**。脳科学者は、**強い警告を発信し続けている**。